

# 詩と永遠

吉川幸次郎／梅原猛

詩と永遠

学問の精神は対話である。事物の真相に迫る方法を最も素朴な形で表わせば、質疑応答の過程の推進にある。プラトンの対話篇や論語、バイブル、仏典を読んでみれば解るように、人世の諸問題はすべて相互の問答の中で究明されようと試みられている。自然科学の自然法則（真理）を探求する方法もまた、人と自然との対話である。無言でする読書も、著者と対話するつもりで読んでこそ、自分のものになる。私達は現代が直面する諸問題を捉えて、すぐれた人達の見識を生々しい対話の形でお贈りするのである。学問の真髄にふれるとともに、高く豊かな教養を身につけられんことを。

1967年9月10日  
初版発行

## 詩と永遠

吉川幸次郎 著  
梅原 猛



発行所 雄 渾 社

¥ 300 円 90

発行者 垣 本 剛 一

京都市左京区京都大学前／電話(075)78-9174~7振替京都1914

印刷／株式会社 図書印刷 同 朋 舎 製本／大日本製本紙工株式会社  
用紙／北越製紙(丸大紙業株式会社) 表紙／日本クロス工業株式会社

落丁・乱丁のありました際にはおとりかえいたします。

## はしがき

私は近ごろ、ある女流小説家が、みずからの作品について書いた手記を、読んだ。彼女ははじめ、いわゆる私小説を、弛緩した文学形式として、書くことをいさぎよしとしなかつた。しかし書いた。書いたものを読み返して、彼女はおどろいた。私が私を書いたときには、私の意識にのぼらなかつた現実が、私小説でない小説よりも、より歴然と、確実に、示されている部分が、あつた。

この対話も、梅原君と閑話両日の結果である。がんらい乏しい私の思考の力は、筆をとって書いた文章におけるほど、働いていない。またそもそも、速記者をそばにおいた対話は、思考の力をはたらかせるひまを与えられぬ言語が、大半であつた。それだけに、私の自覚せざる思考の方向を、露呈している可能性も、ないとはいえない。また、そもそも私は、梅原君の好意に甘え、あるいはそのおだてにのつて、いささか私自身を語りすぎているようである。もっとも、この若い哲学者にくいさがつた方が、本当の対話になつ

たろうにと、くやまれる。梅原君の寛容に感謝せねばならぬ。

あるいはまた、私自身について、私自身も自覚せぬ部分を、多少は露呈しているにしても、卒爾とはいえ、これも學術の言語である。文學の言語のごとく、自覚せざるものに波及することはあるまい。割り切れぬものによせる私の興味は、だんだん増大しつつあるけれども、それを割り切り得るところまでは、せいぜい割り切ろうというのが、私の學術の方法である。この対話でも、せいぜい問題を割り切ろうとしている。いわんや、私のごとき単純な人物、割り切れない面などはがんらいあまりもたない人物の、それでも人間であるゆえにもつ割り切れぬ面、一見そう見えるものが実は思考の未熟からくる自己矛盾にすぎないのを除いても、なお残るそうした面が、行間にはみだしているかどうか。

新しい思考にひまのない言語は、私が旧著で書いたものを、実はしばしば、より不完全にくり返している。もっとも多くの重複は、岩波版『支那人の古典とその生活』に見られるであろうし、短い文章では、『支那人の空想力』『本居宣長』『膠着語の文學』などの記述を、私自身が借用している。あるいは将来、何かの文章に、この対話の不用意な言語から、逆に借用し得るものがあり、私は、この対話の中の私と、そうしてより多くは梅原

君とに、感謝すべき場合が、発生するかも知れない。

丁未八月十七日

吉川幸次郎

はしがき

△詩と永遠▽

も  
く  
じ

はしがき 吉川幸次郎

## 詩とは何か

言語をいかに読むか／ 2

―話者の心理に踏みこむ技術―

言葉そのものが存在／ 3

「本を読む」ということ／ 3

―言葉は一回限りの表象―

人間は変らない／ 6

いかに忠実に生きるか／ 8

人間はいかに分裂していくか／ 9

―「理は一にして分は殊なり」―

『史記』と二十世紀の東洋史／ 11

ハイデッガーとサルトル／ 15

現代の論理／ 17



「ある」と「あります」	／ 19
日本の議論	／ 21
表現は選択である	／ 25
— 司馬温公と親鸞 —	
孔子は「述べて作らず」	／ 29
中国文明と日本文明	／ 30
眞実は矛盾を含んでいる	／ 32
言語は指摘である	／ 34
中国の詩と西洋の詩	／ 35
杜甫の詩について	／ 37
— 「慈恩寺の塔に登る」 —	
詩は説明不可能なもの	／ 42
朔太郎の詩と藤村の詩	／ 46
シンボルとしての言語	／ 47
— 中国語と日本語 —	

## 詩の精神について

- 象徴と比喩／51  
 詩は論理である／53  
 日本 の 詩／54  
 —藤原定家をめぐって—  
 象徴と枕詞／58  
 「綾鼓」と世阿弥の自覚／60  
 —ほんとうの現実には輪郭をはっきりさせない—  
 ドイツ美学のとらえ方／64  
 日本 の 美学／65  
 —美しい悲哀—  
 日本文学の弱さ／69  
 理屈を排除しなければこそ／71  
 万葉集と古今集／75  
 —その時間感覚—  
 歌 と 詩／77

近代 詩／79

―萩原朔太郎／三好達治／中野重治／島崎藤村―

杜甫 と 詩／81

―象徴的でなにか無限定なもの―

杜甫「日暮」について／82

杜甫の精神／88

―自己を主張する精神―

人間は不滅である／89

―歴史は無限の連続である―

詩の散文性／91

疑縮した詩／93

日本語について／96

詩 人／99

―病的な人間―

杜甫と世阿弥／101

孤独は詩人の運命である／105

## 中国文明をどうみるか

予言者としての詩人	／	107
哲学者と詩	／	109
徂来と日本の哲学者	／	111
エロスと詩	／	114
西洋と中国	／	117
現代と詩	／	122
物質主義	／	127
「子は怪力乱神を語らず」	／	130
「天子れを喪ぼせり」	／	132
人間の道	／	133
—孔子の信念—		
「千歳の日至も、坐して致すべきなり」	／	134
「吾が生や涯りあり」しかし「知は涯り無し」	／	135

中国の思考	137
— 荘子と墨子 —	
中国の感覺主義	138
仏教と人間主義	141
人間の善と宋学の理論	144
— 世界はすべて物質である —	
聖人という概念	146
「江河日に下る」	148
— 下降史観 —	
持統史観	151
終末論とキリスト教	153
下降史観と永久の円環	155
機械的な進歩史観	157
トインビーとキリスト教	158
中国とヨーロッパの合理主義	160
陽明学と朱子学	162
— 万物みな我に備わる —	

イデアとはどんなものか	166
抽象をどう考えるか	169
—中国とヨーロッパのちがいを	
日本と中国の文化	175
仏教は一種の呪術であった	178
はかなさをうたう詩	179
南北朝は日本の平安朝	182
中国の神話	184
中国と日本の空想	186
中国と恋の歌	188
幻想主義と感覚主義	190
日本語と中国語の感覚	191
<b>中国文学への道</b>	
感覚尊重へのあこがれ	195
二本足の学者	200

東洋学と漢学	／	201
読書と創造	／	203
京都の支那学	／	205
永遠への努力	／	207
『史記』の人間像と現代	／	208
歴史書をいかに読むか	／	210
私と中国の詩	／	212
『元曲』について	／	214
詩の分析とニュークリティシズム	／	217
十八世紀の文化	／	218
著書が著者のすべてではない	／	221
日本人の漢詩	／	222
心・言・事 <small>こゝろことことば</small>	／	225
本居宣長の思想	／	226
『源氏物語』	／	229

徂 徠 学 / 2 3 1

漢文は人造言語 / 2 3 2

— 日本文明の重大な盲点 —

日本の古典と中国の歴史書 / 2 3 5

漢訳仏典について / 2 3 7

仏 教 史 学 / 2 3 9

— 眞実はどこにあるか / 2 4 1

— 言葉の音声のない間に —

あとがき 梅 原 猛

読者のための読後ノート



## 詩とは何か

梅原 吉川先生の御本を読みはじめたのは、私の学生時代からですから、すでに二十  
たち、個人的に先生からいろいろお教えをいただいでから、五、六年になるのですが、き  
ょうは先生に、一つには詩を中心にお話をねがい、もう一つには東洋の文化全体、東洋の  
智恵ということを中心に、お話をねがって、私がふだんから考えているいろんな疑問を、  
先生におたずねすると同時に、それにもとづいて私も考えていきたいと思っております。  
まず全体のテーマとしては、「詩と永遠」というテーマでどうかと思うのですが、いか  
がででしょうか。